
山麓荘殺人事件

上杉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山麓荘殺人事件

【NZコード】

N8644M

【作者名】

上杉

【あらすじ】

警部達は山麓荘泊まりに行つた。しかしそこでなんと殺人事件が

今日は警部”股原学（56）”、”刑事の射越隆男（47）”が遊びに行つた。

警「刑事、着いたで。」

刑「ふあ？」

関西弁の警部が隣の席に座つていた刑事の肩を揺すつた。

刑「ふえ？」

刑事は寝惚けているようだつた。

警「函館空港に着いたつてゆうてるんや！」

警部は声を荒げた。

刑「ふえ？」

しかし、まだ刑事は寝惚けていた。

警「さつさと起きんかい！」

警部はさうに声を荒げた。

刑「ほへ？」

それでも刑事は寝惚けていた。

刑「がはつ……ゴホゴホ……てめー何しやがんだ！」

刑事は咽^{むせむ}てからようやく目を覚ました。

警部の強烈なボディーブローが刑事のストマックを直撃した。プロボクサーでも一発Ｋ・Ｏ・間違いなしの見事な右ストレートだつた。

警「刑事が起きひんのが悪いんや。」

刑「だからつて、ゴホゴホ……普通、寝てるところにこんな強烈なボディーブローを食らわす奴があるかよ？ ショック死したらどうしてくれんだよ？」

警「心配せんでええよ。優一の骨は俺が拾つたるから
警部は至つて笑顔で言つてのけた。

刑「……」

刑事は「それだけは勘弁してくれ」といつた表情をしていた。

森「クス……あなた達つて、本当に面白いわね。見ていて飽きない

わ。観察日記をつけて養母さんに送つたら、喜んでくれるかもね。興味深い素材だつてね。母の日のプレゼントにピッタリかもしけないわ。それはともかくとして、刑事さんだつて悪氣があつてやつたわけじやないんだから許してあげなさい。これは彼女なりの愛情表現なのよ。ただ照れ隠しをしているだけなんだから。

警「も、”森大麒（35）”さん、そんなことあらへんつて！」

しかし、その言葉とは裏腹に警部の顔は秋の紅葉シーズンよりも足早く赤くなつていた。

森「刑事さん、もう少し正直になつても良いんじやなくて？」

刑「……。」

客「あの～……お取り込み中の所を大変恐縮ですが、空港に着きましたので……。」

見回りに来た客室乗務員に降りるよひに促された。警部にとつてはまたとないグッドタイミングの助け船となつたのだ。

警「すみません。すぐに降りますから。」

刑事達は慌てて飛行機を降りた。

刑事・警部・森の3人は函館空港に來ていた。彼らはこれから山奥のペンションに行く予定だつた。本当は宇川という人が学者仲間と行く予定だつたのだが、2人共、風邪で寝込んでしまつたので記念に代わりに刑事達が行くことになつた。本当は、森は宇川の看病をするつもりだつたのだが、孤独原が看病を買って出て、せつかくだからと森も一緒に行くよひに言われたために、森も同行することになつたといつのだ。

3時間後

刑「……つたぐ、何でこんな山奥に建てんだよ？ 来る客の身にもなつてみろよな！」

森「良いじやない？ これぐらい山奥の方がゆつくりできるんじやないかしら？」

警「森さんの言つ通りや。刑事には風情つちゅうもんが分からへんのか？」

刑（風情だあ？ ただ、金がなくて土地が安かつたからこんな山奥に建てたんじやねーのか？）

寝惚けている所に強烈なボディーブローを食らつた刑事はす一びる不機嫌だった。

芋「いらっしゃいませ。宇川様の代わりに来られた宇川様三名様ですかね？」

刑「ええ。」

芋「遠路はるばる『山麓荘』さんろくそうによつこよお越し下さいました。私はこのペンションのオーナーの”芋川貴純（48）”と申します。以後お見知りおきを。」

警「いらっしゃいませ、お世話をになります。」

刑事達は中へと案内された。入ると大きな空間、真中にテーブルがあり、階段を昇った一階は個室になっていた。
そしてある人物と再会した。

固「やあ、刑事君達じゃないか？」

警「固富警部、どうしてここに？」

そこには”固富信良（57）”・警部・”高橋秋子（54）”が座っていた。

高「夫婦で旅行なのよ。」

固「秋子さん……。」

高「お義母さんがたまには2人きりで旅行に行つて来いって言つから来たんだよ。」

高「とか何とか言つて、孫が可愛いだけなのよ。学が可愛くつしょうがないみたいだからね。『私が学の面倒を見ていてあげる。』とか何とか言つてたからね。学はもう高校生だつていうのに、未だに孫離れできないんだからね。はははは。」

学とは高木夫妻の娘で古原学のことである。

固「まあ当然だらうな。学は生まれた時から今まで秋子さんとそつくりに成長してきたらしいからね。お義母さんはお義父さんが殉職じゆんしょくなされてから女手一人で秋子さんを育てたんだから。」

警「そうですか……。」

刑「ところでそつちの子は？」

富「初めてまして。私は宇川君達の家に住んでいる”富不徹（60）

”と申します。私は宇川の親戚で、彼の家で暮らしています。」

森は毎度お馴染みの自己紹介をした。

森「元々ここには宇川達が来る予定だったのですが、風邪を引いてしまったので、私達がその代わりに来たんですよ。やるわね、刑事君。こんな美少女を2人も旅行に連れて来るなんて。でも、一般は

止めなさいよ。女の嫉妬は怖いわよ。」

富「そ、そんなんじやないですよ。」

警「まったく、刑事つたら何も分かつてないんですよ。せやろ? 刑事?」

刑「私はただの友達です。それに孤独原君のお皿には刑事さんですから。ねえ宇川君?」

警「てめーまで、何を言つてやがるんだ?」

高「あらあら、良いわねえ? 若いつて。でも警部、氣をつけなさい。刑事君のお父さんの宇川君もかなり鈍感だつたつて亲戚が嘆いていたから。」

警「分かつています。」

刑「……」

ここは黙秘するのが得策と考えた刑事は黙つていた。

芋「刑事さん。」

刑「オーナー、どうしたんですか?」

「こちらの方を紹介しておこうと思いましてね。」川鶴貴純（51）

”さんです”

川「初めまして、宜しく。」

刑「ああ、いらっしゃりを宜しくお願ひします。」

午後7時

芋「皆さん、食事ができました。」

ぞろぞろと人が降りて來た。

芋「あれ?」石森大輝（36）”さんは?」

固「さあ? 寝てるんじゃないですか?」

警「石森大輝さん?」

固「お客様の1人です。」

警「へえ……」

芋「では、起こして来ましょう。彼は夕食ができたら、起こしてくれと言つていましたので。」

芋「石森さん? 石森さん? 夕食ができましたよー。」

しかし、部屋の中から反応はない。

芋「あれ？ おかしいな……鍵はかかっていないみたいだな。

」

オーナーはドアを開けた。すると……

3 賭け

芋「あれ？ おかしいな……鍵はかかっていないみたいだな。」

オーナーはドアを開けた。すると……

芋「！」

オーナーの表情は固まってしまった。

警「どうしたんですか？ オーナー？」

続いて警部が中を覗くと……血塗れの女性の死体があつた。

芋「石森さん……」

警「オーナー！ 入らないで！ 現場を荒さないで下さい！」

芋「現場？ ということは……」

刑「ええ、これは……」

警「『立派な殺人事件』と言いたがつたんだろう？ 刑事君？」

刑「ああ……え？」

工「そういえば、自己紹介がまだだつたね。ボクは”工戸川乱歩（1-8）”。探偵さ。」

警「探偵？」

工「そう。君達と同じ高校生探偵。こんな所でボクの知的好奇心を興奮させるものがあつたなんてね。」

警「てめー、ふざけんな！ 人が一人死んでいるんだぞ！」

警部は息をたてた。

工「では聞くけど君はただ正義感からのみ探偵をやつてているって言うのかい？」

警「それは……つていうかワシは高校生でも探偵でもないぞ。」

工「せつからボクと賭けをしないかい？」

警「賭け？」

工「そう、ボクと君のどちらが探偵として優れているかをね。」

警「何？」

工「賭けの対象は……刑事さん……ボクが勝つた暁には君は刑事さ

んから手を引く。ボクが負けたら……探偵を辞める……これでビックリかな？」

警「んだと。」

工「怖いのかい？負けるのが。」

森「ちよつとあなた、好い加減にしなさいよ。大体刑事さんだつて……。」

警「ええやる。乗つたらやないか。刑事が負けたら、あんたの彼女やううと、嫁やううと何にだつてなつたらやないか。」

森「服部さん、あんた自分の言つていることが分かつているの？」

警「孤独原君、君はどうだね？警部さんは承諾してくれたよ。」

刑「上等だ。やつてやう一じゃねーか。オレはてめーのよつうな奴にはサラサラ負ける気がしねーぜ。」

工「賭けは成立だね。刑事さんも宜しいですね。」

刑「もちろんや。」

森「ちよつと2人とも何を考えているわけ？」

工「森さんは今回、手を出さないで下さい。そちらの方は別に探偵じやなによつですから、そして相応しくないよつですから。宜しいですが。」

警「それで本当にええんやな？」

工「ええ。」

警「刑事、負けたら承知せえへんよ。」

刑「ああ、オレは絶対に負けない。心配するな。」

警「今回は任せたで。」

森「ちよつと刑事君、じうしたのよ？」

工「あいつは人が死んだことを何とも思つてねー。あいつの頭を冷やしてやるのや。」

森「そういうえば刑事君、これが他殺つてじうじうことなのかしら？」

警「ああそのことか？ドアの内側にはギリギリまで血がついているけどドアの外には全く血がついてなくて血痕が途切れている……。」

森「でもそれだけじゃ……。」

警「確かに誰かが気^ふに留めずに拭いたかもしれない。でも決定的な

のは凶器がないことだ。」

森「そういえば……。」

警「だろ?」

警「事件をまとめた。被害者は石森大輝。死因は頸動脈切断による失血死。指の先まで死後硬直が進んでいることから死後約5～6時間経過。つまり死亡推定時刻は午後0時頃～午後1時頃の間ということか。石森が殺された部屋では高橋警部による現場検証が行われていた。崖崩れのため、警察がいつ到着するか見通しが立たなかつたからである。」

刑（間違いないな。オレも調べたけど、死亡推定時刻は警部の言う通りだ。）

刑事は無言で高橋警部の現場検証を見守っていた。

高「あの～……念のためにお聞きしますが、皆さん、午後0時頃～午後0時頃の間は何をしていらっしゃいましたか？」

高橋警部はいつもの習慣で手帳を横にしながらメモを取る用意をした。

宮「俺は……お分かりですかね？ 高橋警部と秋子さんと午後0時30分28秒から午後1時32分13秒まで話をしていましたよね？」

高「ああ。確かに俺の時計の時間を言つたら君が自分の時計の時間を見せてくれたつけ？」

宮「俺の時計は年に0、000001秒しか狂いませんから。参考までにと……。」

警察は自分の懐中時計を取り出して言った。

川「僕達がここに着いたのは午後4時頃です」

刑「それは間違いないです。私が刑事君達を出迎えましたから。」

川「だつたら、函館空港に確認して下さい。僕達は函館空港午後1時15分着の飛行機に乗つてきました。降りる時に客室乗務員の方に声をかけられましたので、確認して下さい。この通りチケットの残りもありますし。」

刑事は搭乗チケットの残りを取り出した。

高「ということは、アリバイがないのはオーナーと川鶴さんの2人ということに……」

高橋警部は手帳にメモしながら言った。

高「そうみたいですね。」

オーナーは高橋警部の相槌あいづちを打つた。

高「この辺りは人の出入口は？」

高橋木警部が尋問した。

芋「このペンションに来る以外に人には一切来ません。」

高「となると、オーナーか、川上さんのどちらかが犯人ということに……。」

高橋警部は言いづらそうに言った。

翌朝

高「川鶴さん、石森さんは面識ありましたか？」

高橋警部は手帳を手にしながら尋問した。

川「ええ……元恋人でした。」

高「え！ 男同士で恋人！ その話は置いといて、オーナーは？」

芋「いいえ。」

高「お2人共石森さんの部屋には入りましたか？」

高橋警部のこの質問にはオーナーが「いいえ」、川鶴が「はい」と答えた。

高「……すると川鶴さんだけが石森さんの部屋に入ったということですね。」

高橋警部は手帳にメモしていた。

高「川鶴さんと石森さんはいつからここに？」

川「俺は今日の午前11時に来ました。」

芋「石森さんは今日の午前10時に来ました。2人共、間違いないです。台帳に書き込んでもらつてありますから。」

高「ありがとうございました。」

高橋警部はオーナーと川鶴に捜査協力に対しての礼を言ってその場

を後にしてた。

高（まあ取り敢えず凶器を特定しないことは始まらないな。）
刑事の足は階段へと向いていた。そして一階の個室を調べていた。

5 仕組まれた推理

刑「ん？（そういえばここの部屋には花瓶がねーよな？石森さんの部屋にはあったのに……。）」

刑事は全部の部屋を見て回った。

刑（やっぱりそうだ。花瓶があったのは石森さんの部屋だけだ。）

刑事は食堂にいた川鶴に尋問を始めた。

刑「川鶴さん、ちょっとお聞きしたいのですが……とこつことはなかつたですか？」

刑事は何かを川鶴に確認した。

川「ああ、そうだよ。よく分かったな？」

川鶴は刑事の期待通りの答えを述べた。

刑「ありがとうございました。」

刑事は川上に礼を言つてその場を後にした。

警「ん？これは……どうやら我々の勝利だな、孤独原君。」

警察は川鶴の部屋で1人勝ち誇っていた。

そして…

警「オーナー、巻尺とヤスリをお借りできますか？」

芋「ああ、これで良いかい？」

オーナーは工具箱から巻尺とヤスリを取り出して、警察に渡した。しかし、事件を解決したと確信していた警察はオーナーの瞳に宿つていた鈍い光を見落としていた。

警「ありがとうございます。」

警察はオーナーに巻尺とヤスリを借りた礼を言つてその場を去った。

刑「ん？花が枯れているな。変だな？別に昨日はそんなに寒くなかったし。」（なるほど……そういうことか。それにこれは……でも、そうするとあれは一体どういうことなんだ？）

刑事は辻襷つじまきの合わないことに頭を悩ませていた。

そしてついに…

刑「警部、犯人が分かりました」

警察は高橋警部に自身たつぱりに言った。

高「そうか？」

高橋警部は安堵^{あんど}したように聞き返した。察は警視庁刑事部長である工戸川警視長の息子で、今までに数々の難事件を解決してきたからである。

刑「そうですね……現場の隣の川上さんの部屋に全員集めて下さい。」

警察は高木警部に川上の部屋に全員を集めるように言った。

警（何？まさか工戸川の奴^{そば}……。）

2人のやり取りの傍で聞いていた刑事はある可能性を懸念^{けねん}していた。

川鶴の部屋

刑「僕には分かりましたよ。石森さんを殺害した犯人が。」

警察が推理シヨーを始めた。

高「一体、誰なんだ？このとても良い頭脳の持ち主にも解けなかつた難問がお前なんかに解けるか！？」

高橋警部が尋ねた。

そして：

刑「石森氏を殺害した犯人、それはあなたです！川鶴さん！」

警察は川鶴を指差した。

川「！」

犯人だと言われた川鶴は硬直した。

刑「認めて頂けますね？」

6 トリック

犯人だと言われた川鶴は硬直した。

刑「認めて頂けますね？」

警察は穏やかな口調で自白を促した。

川「どうして、オレが犯人なんだ？」

川上は察に聞き返した。

刑「無駄ですよ。私はあなたの部屋でこれを発見したんですから。」
警察は巻尺を取り出した。

刑「これは巻尺です。そしてここにもう一つオーナーにお借りしてあります。これをヤスリにかけると……」

警察はオーナーに借りた巻尺にヤスリをかけ始めた。

刑「できた。警部、この布をピンと張つて持つていて下さい。」

警察は高橋警部に白い布を渡した。

高「ああ。」

高木警部は言われた通りに白い布をピンと張つて持つた。

シャア

察が巻尺を振り下ろすと白い布は真二つに裁断された。

刑「どうです？これなら頸動脈けいどうみやくを切断できるでしょう？」

警察は得意満面に川鶴の方を見た。

高「なるほど。」

高橋警部が相槌あいづちを打つた。

刑「これは川鶴さんの部屋で発見したほうの巻尺です。これにある液体を垂らすと……警部、照明を暗くして下さい。」

警察は高橋警部に部屋の照明を落とすように指示した。

高橋警部は察に言われた通りに部屋の照明を落とした。すると部屋は薄暗くなつた。そして警察がある液体をもう一つの巻尺に垂らすと巻尺は青白光を放ち出した。

皆「……」

警「これはルミノールです。つまりこの巻尺に血痕が付着していたということですよ。川鶴さん、認めてくれますね？」

警察は完全勝利を確信し刑事に見せつけるように川鶴に言い放った。

川「オレは知らない。何かの間違えだ！」

川鶴は自分が犯人とする警察の推理には納得しなかったようだ。

警「ではこれでどうです？」

警察はベッドにルミノールを垂らし始めた。すると、垂らした部分が青白く光った。

工「これは……。」

刑「恐らく巻尺の血痕を拭いた時に、誤って巻尺から手を放してしまって巻尺が巻き込まれて血が飛び散ったのでしょうか。」

その後……。

警「遅くなりまして、すみません。」

ちょうど道が開通して駆けつけた警察官が来た。

刑「すいません、渋滞していたので。川鶴さんは署の方で……。」

高橋警部が川鶴に言った。

川「俺知らない！ 何もやつていない！ 何でおまえ何もやつてないくせに偉そうなこと言つてるんだよ。」

川鶴は抵抗したが警察に連行されて行つた。

警「工戸川君この勝負負つたよ。刑事さんから手を引いてもらおうか？」

警察は勝ち誇るよつて言つた。

工「……。」

工戸川は無言のままだった。

刑「ではもうこうことで工戸川さん、約束ですよ。」

工「……。」

すると警察は刑事を連れて行つた。しかし固富も森も平然としていた。

森（え？どうことなの？孤独原君も刑事さんもどうしてこんなに落ちついていられるわけ？あなたたちは推理で負けたんでしょう？それはあなたたちにとつては許しがたい事実でしょ？しかも孤独原君が刑事さんを諦めることになるというのに……。）

森は刑事の方に悲しい視線をやりながら思つた。森といえどもそう簡単に人の考えている所を言い当てることができるわけではなかつた。

芋「皆さん、犯人も捕まつたことですし、今夜はパアツとやりませんか？」

オーナーが言った。

警「良いですねえ。是非そつしましょ。」

森「孤独原君……」

森は心配になつて孤独原に声をかけた。

孤「……」

刑「……まだ勝負は着いちゃいねーよ。」

刑事は余裕の表情で言った。

刑「え？」

森は刑事から帰つて来た意外な反応に驚きを隠せなかつた。すると……

刑「川鵜さんは犯人じやない。工戸川は犯人にミスリードされちまつたんだ。あいつは勝負に焦るあまりに冷静さを欠いていたからな。」

刑事は淡々と言つた。）

森「だつたらどうして言わなかつたの？ 刑事さんだつて……。」

森は刑事に抗議するように言った。

刑「森、お前が本心からそう思つているんだつたらお前は刑事といふ探偵を見縊り過ぎてるぜ。あいつは普段こそ冷静なんて無縁だけど探偵として事件に臨めば冷徹に真実を見透かす探偵なんだぜ。俺は探偵として最大のライバルは他の誰でもなく、警部だと思つてゐからな。」

刑事は精悍な顔つきをしながら言った。

刑「……なるほどね。だからあなたも刑事さんもあんなに落ち着いていられたつてわけね」

森も淡々と応対した。

刑「そういうことだ。さっきの話だけど証拠も、手口も分かつたんだ。けどあの謎が解けねーことには……」

刑事は考えが行き詰った時の彼の癖である髪の毛を搔き鳴らすといふ行動をしながら言った。

森「あの謎？」

刑「……ってことなんだけどさ。」

刑事は自分で辻褄の合わない部分を森に話した。

すると、信じられない言葉が返ってきた。

森「あら、あんたはそんなことで悩んでいたわけ？」

森は拍子抜けしたように言った。

刑「え？」

刑事は森の拍子抜けしたというような表情に驚いた。

森「それは……というわけなのよ。」

……の部分にひそひそと何か言った。

森は優一が辻褄の合わないと頭を抱えていたことについても容易く答えを授けた。

刑「そうか。そういうえばそんな話を聞いたことがあったよ……まあ謎は全て解けたぜ。サンキュー森、お前のおかげだぜ。」

笑みを浮かべた。

刑事は全ての謎が解け、犯人を追い詰める準備をするためにある所に向かつた。

刑「警部！調べて頂きたいものがあるのですが……。」

刑事は高橋警部にある物を調べるよう手配した。

そして刑事はある場所に向かつた。

その夜

殺害された石森の部屋に忍び寄る人影があつた。その影は部屋に入つて行った。そして窓の方へ進んで行きそこに辿り着くと……花瓶を手にした。

「そう……ルミノール反応とはルミノールが酸化されそれが励起状態の3-(マイナス)アミノフタル酸になり、さらに基底状態の3-アミノフタル酸に戻ろうとして発光という形でエネルギーを放出する現象のこと。励起状態とは原子や分子が不安定な高いエネルギー状態にあること。反対に基底状態とは最も安定した低いエネルギー状態にあること。そして励起状態の物質はエネルギーを放出して基底状態に戻ろうとする……。」

突然、暗闇の中から若い女性の声が聞こえた。

犯「だ、誰だ?」

影は辺りを見回した。

「通常、警察の血液鑑定においてはルミノール発光試薬はルミノール0.1g、無水炭酸ナトリウム5.0g、30%過酸化水素水15.0mL、水100.0mLを混ぜて作る。これを噴霧ふんむして暗闇で見た時に青白い光を発すればそれは血液と疑われる。」

影は慌てふためいて辺りを見回した。

「でもね、それだけでは血液とは認定されないのよ。その後に人血証明検査をするわ。これによつてその血液が人間の物か他の動物の物か分かるのよ。ちなみに血液型まで分かるわ。もちろん血液かどうかなんてことはすぐに分かるわ。そしてルミノール反応は血液中の錯体(中心原子と呼ばれる金属原子または金属イオンの周囲に配位子と呼ばれる分子またはイオンが結合している「配位結合している」化合物のこと)*に反応するから血液を使わなくても起こせる……例えば血液と過酸化水素水の代わりに漂白剤を使えばね。」

若い女性の声は続けた。

「だから戸川がルミノールを巻尺やベッドシーツに垂らしたら反応が出たんだ。しかし、ベッドシーツについていた血痕と思われる物は血液とは色調が微妙に違つた。」

今度は若い男性の声がした。

パチ

部屋に明かりが点いた。

刑「そうですよね？ 真犯人の芋川オーナー。」

芋「何を言つているんだい？ 私はただ……。」

オーナーは慌てて弁解した。

刑「ただ？」

刑事はオーナーに続きを促した。

芋「戸締りの点検に来ただけだよ。」

刑「よくそう嘘が思いつきますね。じゃあその手に持つている花瓶は何ですか？」

刑事はオーナーに別の質問を突きつけた。

芋「こ、これは……。」

オーナーは咄嗟には弁解の言葉が出て来なかつた。

刑「まさかこんな時間に花に水をやりに来たなんてことはないですね？」

刑事はオーナーの先手を取るような言葉を紡いだ。

芋「悪いかね？ さつき水をやり忘れてしまつてね。」

オーナーは刑事の言葉に飛びついた。

刑「ということはその花瓶は元からこのペンションにあつてオーナーが毎日水をやつていたということですか？」

芋「そうだが、それが何か？」

オーナーは冷静さを取り戻しつつ答えた。

刑「その言葉を待つっていましたよ。」

刑事は勝ち誇るよつと言つた。

芋「え？」

オーナーは刑事の言葉の意味が分からなかつた。

刑「その花瓶は石森さんの持つてきたもの。石森さんは旅行先にも花瓶を持って来て花を生けていたと川鶴さんも証言していましたし先程、高橋警部に彼女の両親にも問い合わせてもらつた結果、彼女はいつも旅行先に花瓶と花を持って行くのが習慣だと証言しています。さらにその花瓶からは石森さんの指紋のみが検出されていることも警察に調べてもらつてあります。それに他の部屋には花瓶は一つもありませんでしたしね。つまりあなたが水をやる必要なんか一切ないんですよ。違いますか？」

刑事はオーナーに事実を突きつけた。

芋「……」

オーナーは黙り込んだ。

刑「オーナー、どうしてこの花が枯れているのか分かりますか？」

刑事は再度の質問を投げかけた。

芋「……」

オーナーは言葉を紡げなかつた。

刑「昨日はとりわけ寒いということはなかつた。しかしそこに氷が入れられたんですよ。そしてあなたの犯行はこうです。あなたは川鶴さんが居ない時間を見計らつて彼のアリバイを潰してから石森さんの部屋へ行き、石森さんを殺害した。氷の刃で石森さんの頸動脈を切断することによつてです。そしてその氷に付いた血を拭き取つて花瓶の中に入れた。花瓶からはルミノール反応が出てきました。そして川鶴さんの部屋に漂白剤をつけた巻尺を置き、ベッドシーツに絵の具に混ぜた漂白剤を垂らした。」

芋「私には何のことかサッパリだな。」

オーナーの頭には誤魔化しの言葉しか浮かばなかつた。

刑「しかしあなたはここで一つのミスを犯しました。一つは巻尺に漂白剤をついたことです。二つ目はこのエンジのベッドシーツにつけた絵の具が川鶴さんに気づかれないように本物の血とは微妙に色調が違つたことです。一つ目はベッドシーツのルミノール反応と違つたら困るからだつたのでしよう。血液と漂白剤では発光の仕方が違うそうですからね。だから、川鶴さんは既に釈放されています。

芋「だからと言つて私が犯人だつてことには……それに私が石森さんの部屋に入つたのは石森さんの遺体を発見した時が初めてだ！」

オーナーは頭に血が上り始め声を荒げた。

刑「まあ良いでしよう。……あなたが捜していったものはこれですね？」

刑事は袋に入つた指輪を取り出した。

芋「！」

オーナーは驚きを隠せなかつた。

刑「あなたは花瓶に氷の刃を入れる時にこの指輪を落としてしまつた。それで後でそのことに気づいたあなたは回収に來た。あなたは『石森さんの部屋に來たのは遺体を発見した時が初めてだ』と言いましたよねえ？だったらどおーしてこれがこの部屋にあるのですか？お教え願いませんか？」

刑事はオーナーを追い詰めるにたる言葉を投げかけた。

芋「……石森……学が悪いんだ。あいつは私に貢みつがせるだけ貢みつがせて、私を捨てて川鵜と……」。

オーナーは頃垂れながら言つた。

芋「ご同行願えますね？」

芋「はい……」

オーナーは連行されて行つた。

オーナーは以前石森と恋人だつたが（矛盾しているけどご勘弁ください。）彼はその頃から川鵜と付き合つていて、オーナーに貢みつがせた金で遊んでいたということを後で知つてそれ以来、彼女と川鵜を恨んでいた。そして偶然石森と川鵜がオーナーのペンションに泊まりに來たので、以前から計画していた方法で川鵜に罪を被せて石森を殺害することを決意したとのことだつた。

—翌日—

森「良かつたわね、刑事君。大切な刑事さんを諦めずに済んで。最も今回の犯人のトリックがあまりにも幼稚だったから当たり前だろうけれどね。」

警「さすが孤独原や。」

警部は刑事の肩を叩きながら言つた。

刑「だから言つただろう?俺は負ける気はねーってな。」

刑事は当たり前だろといつ表情で言つた。

警「刑事君、どうやら、君の勝ちのよつだね。」

警察が刑事に言つた。

刑「いや俺の勝ちじゃない。確かに俺達の勝ちだけど、それは森のおかげだ。森がルミノール反応のことを教えてくれたからだ。だから俺とお前の勝負は引き分けさ。工戸川。」

工「いや、僕の負けだよ。君は今までの成果を發揮したね。どうやら今回は勝負に焦るあまりに冷静さを欠いていた。約束通り、ボクは探偵を辞めるよ。」

警「その必要はないぜ。」

工「え?」

警「なんだつて俺とお前の勝負は引き分けなんだからなあ。……それにお前が探偵を辞めたからつて誰も喜ばねーぜえ。……これからも真実を追究し続けるよ。……なんたつて推理は勝負するものじやないからなあ。そうだろ、工戸川君。」

工「どうやら今回の僕は刑事君に何から何まで完敗つてわけか……」

警部さん、あなたは刑事君にこそ相応しい。

警「当たり前や、刑事は腕を上げたんだ。なあ?刑事?」

刑「……ああ。」

刑事は照ながら返事をした。

刑「そういえば森はどうしてあんなことを知っていたんだ？」

森「あんたのほうこそ、私のことを見縊みくびり過ぎていないかしら？あれくらいのことは元々知っていたわよ。まあ他にも養母さんに教えてもらつたことは結構あるけどね。養母さんはあなたたちのお父さんたちの捜査の相談に乗つてているらしいからね。いくつから探偵でも化学の知識は養母さんには敵わないからね。」

刑「なるほどな。」

警「でも良かつたな。今回はそんなに大騒おおさわぎになんなくして。」

高「では礼を言つぜ。ありがとよ。」

固「あたしも容疑者から外してくれてありがとうございました。」川「私も一時はどうなることと思つていましたよ。でも刑事さんたちのおかげで無事、釈放することができました。ありがとうございます。」

宮「私のほうからも礼を言います。」

工「じゃあな刑事！」

警「もう帰るのか？」

工「ああ、また事件が起きたよつだ。」

刑「へえ～、頑張れよ。」

工「ああ、ありがとよお。」

刑「ふう、これで寂しくなるな。」

こつして山麓荘で起こつた殺人事件は無事に解決した。
翌日刑事達は山麓荘を後にした。

10 成果（後書き）

ここまで見ててくれた人、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8644m/>

山麓荘殺人事件

2010年10月11日05時29分発行